

# 芥川だより

発行日\*\*\*2018年11月1日 e-mail:akutagawa\_dayori@yahoo.co.jp  
最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集・発行人

下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624



\*\*\*\*\* 一部200円です \*\*\*\*\*



## 知らなかった！リハビリ病院

長年にわたり認知症を患っている要介護4の義母を介護していたある朝、急に立てなくなった。私と家内は認知症が進んだぐらいに思ったのだが、通っているデイサービスの看護師さんが脳梗塞の疑いがあるから病院で検査を受けた方がいいと言われたので、二日前にも受診してもらっていた病院へ行きMRIで検査を受けた結果、脳梗塞であることが判明し入院した。入院後まもなく誤飲による肺炎になり、もう回復は無理かなと思った。認知症の為に会話が十分できず、なすすべがないような状態が続いたが、少しずつ回復し元気になって医療病棟からリハビリ病棟へ移った。

リハビリ病棟へ見舞に行くと若い理学療法士たちが多くいた。なんでも100人余りいるという。廊下や屋外で車いすに乗ったり歩いたりする人に付き添った療法士が目についた。一日に3回のリハビリの時間がある。理学療法、言語療法、作業療法、それぞれに専門の若い人が1時間、合計3時間毎日続ける。義母も最初は非常に嫌がっていたが、何とか続けていると回復は目覚ましかった。半身不随であった手足も少しずつ動かせるようになった。食べ物も粥からとろみのあるもの次には普通の食べ物へと回復し、会話もだいぶましになって出来るようになった。

リハビリ病棟を知らなかった私と家内は、最初は半信半疑で回復は期待していなくて、高い入院費にあきれていたのだが、リハビリの凄さを目のあたりにして入院してよかったと喜んだ。

リハビリ病院のすばらしさを見て、山岳部の後輩であったM君の先見の明を知った。彼は若くして脳梗塞になった親父さんを助けるためにリハビリ専門医になることを決意し医科大学に入り直し医師になった。今も要介護5の高齢になられた父親を30年余り介護しながらリハビリ病院の院長をして頑張っている。彼は、いごっそうである。

義母の担当医が「体がしびれたり、しゃべりにくくなったり、脳梗塞の疑いがある時にはすぐに救急車を呼ぶこと。4時間半以内であれば直る可能性がある」と言う。私が脳梗塞について知識があれば義母を救えたにちがいない。

## 死をめぐるあれやこれ(50)

石川 吾郎

堤未果『日本が売られる』を読む

堤未果さんの本によって、これまで私は多くの重大な事実を学びました。彼女の本には、日本のマスメディアがほとんど取りあげない、しかし私たち国民みんなが知るべき事柄が取りあげられています。このほど堤未果さんの新著が出版されました。『日本が売られる』(幻冬舎新書)には二十近くに及ぶ、どれもこれも重大な問題が取りあげられています。

主な項目を上げると、●水が売られる…水道民営化 ●タネが売られる…種子法廃止・農薬規制緩和 ●食の選択肢が売られる…遺伝子組み換え食品表示消滅 ●労働者が売られる…高度プロフェッショナル制度 ●日本人の仕事が売られる…移民五十万人計画 ●医療が売られる…国保消滅 ●老後が売られる…介護の投資商品化 ●個人情報売られる…マイナンバーが外国企業へ ●学校が売られる…公設民営学校解禁、などなど。

安倍政権が推し進める政策によって、私たちの生活のあらゆる場面で、内外のグローバル企業の利益のために日本が売りに出されて、まさに「日本は出血大サービス中」であることを教えてくれます。そして日本のマスコミの多くはこのような事実を国民に伝えず、口を閉ざしたままなのです。この本の一節に「アメリカにゲームを仕掛けられる前のアルゼンチンは食の多様性を誇っていたが、国内の畑が遺伝子組み換えの大豆一色になった後は、経済不況時に飢餓で死ぬ国民が続出した」という記述もあります。スーパー・メキシコの国がこんなことになっていたとは知りませんでした。これは他人事ではなく、安倍政権の政策がこのまま推進されれば、この国にも迫りくる危機なのです。(裏に続く)

中扉に引用された『ドナドナ』の歌詞を、この本を読んだ後に再び読み返してみても、私は愕然としました。売られていく「悲しそうな目をした子牛」とは、私たち日本人自身なのだ、ということに気づかされます。

この本は、ぜひ周囲の方々と一緒に読み合わせて議論をしていただきたいと思います。私たち国民が知らぬ間に、自分たちが売りに出されているのですから。

## 芥川だより一四二号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 56	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談 6	祖蔵哲	3
大峯奥駈道 20	下村嘉明	6
大人の今昔物語 50	石川吾郎	7
我がおくのほそ道の旅 21	成瀬和之	7
B級サラリーマン渡世譚 64	明石幸次郎	8
オクラの山たより 27	因了生	9
隠された歴史 1	満田正賢	12
見えない人	古城悠	14
編集後記	嘉	17
ふみの道草 2	山椒魚	18
俳句	土田裕	18
	影山武司	18

## 素老人☆よもだ帳 (56)

坂本 一光

### ◆馬耳東風原発辺野古核の傘

表題に記した問題に限らず、馬耳東風という標語が見事に当てはまる政権の支配がいましばらく続くことになった。「馬耳東風」とは、岩波国語辞典(第7版)によれば、「人の意見や批評を全く気にかけないで聞き流すこと」である。こんなとき素老人には「ほ川柳が浮かんでは消える。

### 危険球なんぼ投けてもまだ総理

聞き流される前に、主審である(もちろん主権者の意)国民には、彼に向って「危険球退場！」を宣告できる機会は何度もあった。しかし、国民はそうせず、彼の一強体制は、小選挙区制度や政党助成金制度にも守られて続いていた。その結果、

### 政治家の言葉の意味が辞書にない

しつかりが見事ちやつかり抜けている  
真摯にと右から左聞き流す

それが国民に対する政権の態度になる。政権は、国民がそう思っていることを百も承知している。しかし高をくくって馬耳東風を決め込んでいたのではない。それは意図した、高等なる心理作戦である。真摯に受け止めると言いながら、実際にはいくら批判しても耳を貸さない。貸さ

ないどころか恥も外聞もない言動を繰り返す。そうすることで、言葉が意味をなさず、何を言っても通じない無力感を国民に植え付けることが狙いである。

その狙いは相当程度に成功しているのかもしれない。たとえば少し前まで、北の脅威をあまりミサイル攻撃やその落下に備えると称した、まことに嗤うべき訓練がまことしやかに行われた。それはまたまことしやかに、にぎにぎしく新聞紙面やテレビ画面を飾って何の不思議もない風であった。その一方で、公益や国益なる言葉が独り歩きし、最近では、社会保障制度の維持や財政再建のために万全の態勢をとって消費税を増税すると、総理自ら高らかに宣言したりするのである。

### 増税も自慢話のネタにする

こうして政権は何でもできると思っている。あとは総理自ら高言するとおり、政権の最大の目標である憲法改正に向かつてまっしぐら、というところなのだ。う。こんな状況を見ていると、素老人は、

### 「戦争があつてこそその平和だ」と

ムツソリーニの妄想今も笑えぬと思う。しかし、笑えない世を嗤うことができるのが人間である。政権の馬耳東風政策に絶望することを止め、今度は政権の意味のないおしやべりを笑い飛ばし、国民の側こそが馬耳東風の態度を示す番である。なにしろ、彼らの言葉の何と空虚なことか。一億総活躍と言い、女性が輝く社会

と言い、ひとつくり革命と言う政権の呆れた口は、少し前には戦闘を衝突と言い、墜落を不時着と言っていたのである。笑えない、しかし、嗤うしかない空虚な言葉で遊ぶ政権はもうごめんである。

### オスプレイ大破を不時着と言う国の

### 政治の貧困言葉に現る

戦闘を衝突と言うこの国は  
政治も言葉も荒み果てしか

### この国の政治荒めばこの国の

### 言葉も荒む大破不時着

### その昔『哲字の貧困』という書物あり

### 大破不時着とは言葉の貧困

人間の笑いや嗤いは、権力の暴走を止める力になる。権力が無力化した言葉に意味を与えるのは国民をおいてない。そのためには、言えるときに言わなければならない。誰一人言わなかつたと言われてはならない。

さて、巨大な力を向こうに回し打ち破った快拳が沖繩であった。去る九月三十日投票の沖繩県知事選挙である。急逝した翁長雄志知事の県政を引き継ぐと宣言した玉城デニー候補が、普天間の危険を除去する唯一の解決策は辺野古基地建设であるとして強行している政権に丸抱えされながら、それに一言も触れず知事選挙に臨んだ相手候補を見事に打ち破ったのである。玉城氏は過去最多となる三十九万六千六百三十二票を得て、相手候補

に八万七百七十四票の大差をつける圧勝であった。これで何度目か、またもや民意は明らかに示されたが、総理はただ「真摯に受け止める」と例によって無意味なコメントを述べただけであった。民意を真摯に受け止め、したがって聞き流した結果、国は辺野古をめぐる問題で対抗措置をとった。すなわち、防衛省沖縄防衛局は十月十七日、辺野古の米軍新基地建設をめぐり、埋め立て承認を撤回した沖縄県の措置を不服として、「行政不服審査法」に基づくと称し国土交通省に審査を請求、承認撤回の効力停止を申し立てた。同様の申し立ては翁長前知事の際にもなされたことであるが、この法律は専門家によれば、私人が行政機関から不利益な措置を受けたときに救済を求めるための法律である。

国が私人に変身見事法治国  
法治国変幻自在私人にも  
自作自演国が国を救済す

まことに、天に唾し沖縄に唾する行為である。

新知事の沖縄県議会定例会における就任あいさつは、知事選挙の敗北結果を受けた総理のコメントや、先に述べた対抗措置について記者会見をする防衛大臣の言葉と対照をなした。新知事は、『魂の飢餓感』という言葉で沖縄県民の痛切な思いを訴え続けた前知事の遺志を受け継ぎ、辺野古新基地建設を阻止するとの決意を

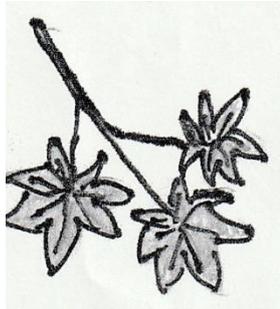
あらためて表明した。あわせて「誇りある豊かな沖縄」の実現に向けた決意も表明し、「誇りある豊かさ」を達成するための三つの視点を示した。

①復帰五十年を迎える「新時代沖縄」を日本経済の再生に貢献しうる方向に導く。  
②辺野古新基地に反対し、普天間基地の一日も早い閉鎖・返還を政府に強く求める。  
③誰一人取り残さず、全ての人の尊厳を守り、多様性や寛容性を大切にしたい共生の社会をつくる。  
「真摯に受け止め、しっかりと、謙虚に、ていねいに説明する」などと繰り返し総理の言葉と何と対照的であることか。  
翁長前知事の言動を見聞きするたびに、

一点の偽りもなき保守の人

がこの国にはまだいる、と素老人は思ってきた。もちろん、もはや死語ともなつた革新の人もこの国にはいる。保守、革新、言葉が意味をもつ限り、そこには希望があるだろうと思う。

（かたちは心であり、心はかたちになる）  
■大分の素老人



## 哲学爺いの時事放談(6)

祖蔵 哲

表現と自由

「新潮45」というオピニオン雑誌がある。正確にはあった。それは十月号をもって休刊という事実上の廃刊になったからだ。その最初のきっかけを作ったのは、もともと同紙八月号で掲載した自民党衆院議員・杉田水脈氏の寄稿文『LGBT支援の度が過ぎる』である。その記事で「LGBTだからといって、実際そんなに差別されているものでしょうか」として、LGBTへの差別を解消する動きについて疑問を呈した。

また、「LGBTのカップルのために税金を使うことに賛同が得られるものでしょうか。彼ら彼女らは子供を作らない、つまり『生産性』がないのです」「なぜ男と女、二つの性だけではいけないのでしょうか」などとまったく主観的な持論を展開した。これを受けて大きな批判や反論が起きた。LGBT当事者やその支援団体だけでなく、内閣府や自民党内部からの異論もあった。

それらの議論は白熱しました、個人攻撃や中傷のレベルまでにことがエスカレートしていた矢先、同紙の十月号で特集『そんなにかわしいか杉田水脈論文』が掲載された。この記事は先の杉田発言「LGBT差別」を「擁護」する七人の意見論文を掲載したものだ。

しかし、その擁護の「表現」手法自体

が「差別的」な意図を伴ったため、さらに批判や非難は最初の「差別発言」自体から離れ、その「表現」自体への問題へと変化していった。むろん議論の内容に関しては、読者には杉田氏の元論文とこの擁護論文、特に小川栄太郎氏の論文を読んだ上で「内容的」な判断をして欲しいのであるが、「哲学爺い」はそれが内容の是非が目的ではない。

個人が「ある対象」について自己の内部で「感じ」「考え」（「この問題」）そしてそれを自分の外に向け「表現」し「言葉で」「書く」「話す」（「出版物という物」）そして「主張する」さらに「賛同を求める」さらには「賛同を強要する」という段階でどこまでの「自由」が許されるのかという「哲学問題」である。そしてこれは「ある対象」が「不快」に「感じる」時の場合も含む。前者は「表現の自由」の積極的方向になるし、後者は「ヘイトスピーチ」にみられる「表現の自由」の消極的、制限方向につながる。

哲学的な問題としては、この号でも何度も話したデカルト哲学「**心ころVS物**」の「二元論」である。また、この問題は私的な「個人」が「感じる」こと、つまり「感情的なもの」とそれを言葉にしたもの「言語化されたもの」が同じかどうかという「言語論の問題」ともつながる。さらには、言語化された「言葉」が「他者」に受け入れられていく中で「社会」で変化し、さらにその変化がその社会の構成員でもある自分に返ってきて、また自己に影響を及ぼすという、「弁証法的」

物活論的哲学問題も提示される。難しい哲学的な話はこの場にはふさわしくないので、以降、具体的な「表現の自由」という「事件」のなかでなぜ対立が起きるのかを哲学的に解説、説明してみよう。さらにこの「表現の自由」そのものに疑問を持つ「ある集団」、これは日本に限らず全世界的に増殖している「反歴史主義」すなわち「懐古的保守主義」の実態に哲学的分析を試みたい。なぜなら、この問題こそ、人間という哲学的本質にかかわるものだからである。

### 1 「自由」とは何か

前月号「民主主義の正統となにか」でも書いたが、社会的「自由」という「概念」は、西欧的社会制度を構成する基本である。「好き勝手」「自由放任」の「自由」ではなく「社会契約論」に基づいた「個人の権利」が「制限された」状態に成り立つのが近代的国民国家での「自由」概念である。「他から抑圧される」ではなく「自ら制限する」のは必然であることが前提となる。その上で先の杉田論文『LGBT支援の度が過ぎる』を考えてみると、まずこの論文が「事実」と異なるかどうかがまず問題となる。事実でなければ「真実でないこと」を根拠に自分に意見を表現していることになる。「事実調査」の結果、「支援の度は過ぎていない」ということが判明した。「事実問題」は決着したからこの論文への「批判」は検討するに値しないということになるが、しかし、問題は次からである。ここで杉田氏は謝罪をしなかった。つまり「LGBT」と

いう存在自体が「度を越している」という論理に持つていったのである。恐らく、「レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー」という存在自体が「生産性」「子供を生む」がないというのではなく、「存在自体」を受け入れられないという主観的「感情」からであろう。それを持つてまわって「国家予算の投入効果」の問題にすり替えているのは国会議員という立場からであろうが、これはされに輪をかけて最悪の「自由の抑圧」である。国家権力である一員が「個人の感情」を述べることはただの感想ではない。それ自体で「自由の抑圧」になる。国民の一員である者の「存在」を否定することは重大な「権利の侵害」である。が、ここでは「こころ」「感情」の自由が留保されることになるのである。

2 「表現の自由」とはその必要「理由」と機能「役割」

「自由は制限されなければならない」という前提での「表現の自由」とはを考えてみる。Wikipediaによると、表現の自由とは、『すべての見解を検閲されたり規制されることもなく表明する権利。外部に向かつて思想・意見・主張・感情などを表現したり、発表する自由。個人におけるそうした自由だけでなく、報道・出版・放送・映画の(組織による)自由などを含む。内心における精神活動がいくら自由でもそれを外部に表明する自由がなければほとんど意味をなさないから、「表現の自由」はいわゆる精神的自由権の中心的地位を占めるとされる。』と説明

されている。

「表現の自由」が「制限されるべきでない(保障されるべき)理由は二つある。一つは、この「表明」が「自己の価値実現」のために必要不可欠であるからということ。つまり「表現」として外に出さなければ「他者」に理解されないからという「自己実現」のためという「個人的理由」である。もう一つは、主権者たる国民の自由な討論と意見形成を可能にすることにより、「民主主義社会」の存立にとって重要な意義を持つという「社会的理由」である。

「民主主義社会」において「表現の自由」は四つの機能(役割)を持つとされている。第一は、「個人の自己実現」を保障する方法としての機能である。すなわち、表現行為は、思想の発達や知的探究や自己確認のために不可欠であり、そうした精神の発達によって、個人は人格および人間としての可能性を実現することができる。第二は、「真理に到達する手段」としての機能である。これは「異なる意見の「表現の自由」議論」の必要性を示す根拠である。すなわち、もともと健全でもっとも合理的な判断というのは、それに反対するために提出されるあらゆる事実と議論を考慮することによって、初めて下すことができるというものである。対論でもって議論されずに最初から「真理」であると判断された「判断」はその理由も不明確であり「真理には到達していない」からである。「意見の自由市場」や「思想の自由市場」という言葉がある。

多数の表現主体が各人のもっているさまざまな意見を自由に戦わせることを通じてもっとも合理的な結果に至るという社会進歩説の一つであるという説である。しかし、注意しなければならぬのは、これが一度も検証されたことのない「仮説」であることだ。

第三は、政治を含む社会的政策決定に社会の「構成員の参加を保障する方法」としての機能である。第四は、社会における「安定と変化の均衡を維持する機能」、つまり社会が変わるにせよ十分な議論の末の納得という過程が必要であるということである。

以上のように「表現の自由」は「民主主義制度」という「社会共同体」において「個人vs共同体」のなかでの「個人と社会との調和」としての自己実現での「機能」であり「手段」であり、その関係の「維持」であることがわかる。

3 「自由」はでなく「表現」が制限される。

前項でも書いたが民主主義での「自由」は「制限すべき」「自律的」「自由」であるから「表現の自由」は(表現の)「自由」自体が制限されるのではない。「自由の侵害」ではなく「表現が制限される」のである。

「制限」もまた「個人」と「共同体社会」の「自己実現」を阻むものに対してかけられる。「個人」では「人権侵害」として「社会共同体」は「国家の存立の侵害」である。前者では「名誉棄損」や「プライバシーの侵害」があり、後者では「機

密保持法」などがある。法的には「個人の権利を守るための制限」と「国家を守るための個人の権利制限」は対立する。民主主義という共同体であれば後者のほうがなるべく少ないほうが「理想」である。

さて、ある意味「国家」制限を求める「表現の自由」は分かりやすい。それはその制限対象が現実に現れてきているからである。例えば「現行憲法」とか「日米安全保障条約」とかである。対象が明確だから、これ対して反対の「考え」を「表現」することはできる。しかし、問題は個人の感情の表現である。「ある対象」に対して「気持ち悪い」「嫌い」などという「感情」を持ったとき、それを「表現」する場合である。この個人的な感情の対立が問題である。例えば「ヘイトスピーチ」である。

4 「感情」の「表現」としての「ヘイトスピーチ」

「南京虐殺」や「ホロコースト」を否定する「スピーチ」に「表現の自由」はあるのか、ないのか。この問題での線引きはあまり難しくない。それが「歴史的事実」であったかどうかである。しかし、このようなスピーチにしても、あえてそれを「スピーチ」する人々は、その事実を黙殺したいという「感情」がある。そしてこの「表現」が問題なのである。そしてより重要なのはなぜ事実に対してまでそのような感情を持つのかという、「その感情」の方であるのだが。これは、後

のテーマとする。

個人的な「ヘイト」(嫌いの感情)を多数の個人が「スピーチ」(表現)するのが「ヘイトスピーチ」であると思われる、その結果が「感情の高揚」の「扇動」になり「暴力誘発」になる。「ヘイトスピーチ」の主な対象は社会的弱者やマイノリティである。国家がこれに対して「ヘイトスピーチ規制法案」という形で「表現の自由」を「抑圧」するということは問題があるという意見がある。この心配は国家による「表現の自由」の規制が「民主主義の正統性」である「自由」と矛盾するという見方である。これが「全体主義」につながる「滑りやすい坂道の議論」である。しかし、実際にはその「ヘイトスピーチ」は「ポスター」や「出版物」になり社会の一部を構成することになり、「マイノリティ」は存在を脅かされることになる。これは民主主義のもう一つの基本理念である「平等」とは相いれない。

「政治権力」に対する「批判」と「マイノリティ」に対する「侮辱や差別」は同列の「表現」ではない。「ヘイトスピーチ」が正当性を持つためには「侮辱や差別」の「感情」ではなく、その「思想」を「表現」しなければならぬ。当然だが、その思想は主観的「感情」ではなく客観的「事実」に基づかなければならない。現在行われている「ヘイトスピーチ」は「感情的」「不安」や「憎悪」を煽り立てるばかりで「真の原因」を隠している。

5 「唯心論」対「唯物論」の「表現」

さて、「表現の自由」が「個人の主観的感情を持つことの制限」でなく「社会関係における主観的感情の表し方の制限」であることが理解できたと思う。ではこの「個人の主観的感情を持つことの自由」は制限を受けないのかである。さてこの難問を考える前に「感情」というものを哲学的に定義したい。主観的感情は「認識」と同じく、その「対象」を持たなければならぬ。想像であれ、実像であれ、「対象」というものが必要である。ではその「対象」はどのように形成されたであろうか。「何もない」ところから「こころ」が作ったものか「具体的な対象」を言葉という「概念」が作ったのか。

「新潮45」十月号で小川栄太郎氏が描いた「杉田発言擁護論文」はこの「こころと概念」の対立を浮き彫りにして「こころ」優位を根拠にこの差別発言の正当化を立証するという「典型的な知識人的保守論者」のスタイルをとっている。小川氏は安倍政権に近い論者として知られているらしいが、百田尚樹らと同じように文芸ジャンルの人である。しかし、その思想背景はいわゆる保守右翼といわれる系統につながり「嫌韓」「嫌中」などの「感情論」を裏付ける「論理」をつくる「保守理論家」であるが、特に反米保守と言われる人に根強い固有思想がある。そうした固有思想の表れの一つがこの小川氏の論文である。氏は同論文で「LGBT」は「嗜好、趣味の問題」「感情の問題」として世間の批判をこの「感情を持つことの自由」に対する挑戦として「自

由の侵害」と逆に訴えている。氏は「LGBT」に対して「個人的主観的に嫌だ」という感情が起ころ「これはどうしようもない」として「嫌という感情を制限せよ」というなら痴漢をする権利を認めよつまり「触られる女性は嫌という感情を我慢せよ」という論理に飛躍させる。この論理の飛躍は全く非論理的な「出来の悪い文芸的比喩」であるが根本には「こころ」が感じることは真理であるという「固有思想」が根拠となっているらしい。これは哲学的には「環境」を物として考えるという「唯物論」に対する「唯心論」の部類といえる。哲学として正確ではないが。そういった意味での「唯物論者」からの批判を受けて氏は「それでも私は嫌という気持ちは捨てられない」という。それは「日本の伝統のこころ」がそうさせているのだから止めようがないとい考えているらしい。つまり「LGBT」は「日本の伝統」と対立し「こころ」が「嫌」と反応するからという論理になる。この類の保守論者の「共通思考」はこの「過去の日本の伝統優位」である。しかし、過去の伝統が果たして現在の価値観「自由」「平等」「協調」と合致するのか。「社会契約論を一定認めるとすると「古来」は取り合えず「統合」が優先されるため個人間は不平等であり「我慢」が当然であり「こころの葛藤」としての「感情」もなかったことが想像される。つまり「統合」という「権力優先」である古来はその個人の反発「感情」は薄かったのである。「LGBT」も古来から存在していた

## 大峯奥駈道 (20)

下村 嘉明

五月の連休に大峯奥駈道を途中で挫折した経験から、改めて体力の強化を痛感したので毎日のトレーニングを強化した。これまでは、七キロを歩いていただけだったが、走るようにした。六甲山へも毎週行くように計画したが、なかなか難しい。

しかし、私には未だ消えないうぬぼれがあった。今の体力でも行けるのではないかとといううぬぼれである。たまたま運悪く行けなかったのではないかという思いが消えなかった。

その思いを抑えがたくて、友人の熊さんに電話すると、熊さんも大峯奥駈道に興味があつて行きたいと言う。それで、七月に二人で行く約束をしたのである。しかし、彼は仕事の都合もあつて一週間は無理だということで、奥駈の半分を三日間でいく計画をした。

しかし、出発する間際になって熊さんは都合がつかず、代わりに彼の山岳会の西川さんと坂下さんが行くことになった。坂下さんとは、六甲全山縦走を共にしたこともある。二人とも学校の教師であつた。

奥駈の難しさの一つは、アプローチである。そのために、車二台で登山口と下山口に止めて置いて下山後に回収するという作戦を立てた。

計画は、前鬼から吉野へ三日間で歩く

計画である。弥山の山小屋と山上ヶ岳の宿坊に泊まるから、テント泊の準備はいらない。その分荷物は軽くなる。軽い荷物なら楽勝に行けると考えたのだ。

七月末の夜、近鉄吉野口駅前待ち合わせをして、駅の休憩所で軽く宴会をして車で仮眠をとり朝三時過ぎに起きて二台で暗い山道を走り吉野山の吉野水分神社手前の広場に止める予定だったが、連休のイベントのために駐車禁止のロープが張られていたので、手前の広くなった道路脇に私の車を止めた。本当にこんな山奥の山道に車を三日間も止めて置いて大丈夫かと少し心配になった。

そして、西川さんの車に三人乗って吉野から前鬼を目指す。早朝の国道一六九号線は走りやすく飛ばすが距離は長い。西川さんは山道には慣れているそうであつた。山道も不安なく走つた。

朝の六時過ぎに前鬼手前の駐車場に着いた。一台の車もなく私たちだけであつた。すぐにザックを担ぎ歩き出した。駐車場から一時間半ほど歩くと小仲坊という宿坊があつた。昔の役行者に仕えた前鬼の子孫だという由緒ある家である。

私たちは、予約もしていないので通り過ぎて登って行つた。大きな杉木立の中に石の階段は続く。昔はたいそう賑わっていたのだろう想像させる石垣がたくさんあつた。多くの宿坊が立ち並んで行者さんたちでいっぱいだった昔を思わせる石垣であつた。

前鬼から奥駈道の太古の辻までの登りは二時間半ぐらいであるから、荷物も軽しい簡単に登れると思つていたが、そうではなかった。

木の階段や岩場が多く、道も荒れていて歩きにくい。初めて歩く道のためか、枝に赤いテープがたまに付けてある程度で心もとない。登りで迷いそうならいだから下りで霧があれば道に迷つても不思議ではない。後で聞いたが、やはり道に迷い遭難事故があつたらしい。しかし、慣れた人なら問題なく歩けるのだろう。

私は、体が重くて汗ばかりで、軽い荷物で楽々と登れると思つていたが、非常に苦しい。やつの思いで太古の辻に着いた。情けない限りだ。

太古の辻は、標高一四五〇メートル程で奥駈道の間地点であるが、笹に覆われた道に標識が立っているだけであつた。如何に登る人が少ないかを物語つていようと思えた。

私は、座りたくなってザックに腰掛けようとしたときに、坂下さんから「山ヒルがついてますよ、取つてあげますから動かないで」と言われた時は、ああ、このあたりはヒルが多いとガイドブックに書いてあつたと思ひ出した。ヒル除けのスプレーを用意すべきだった。

これから、弥山までは遥かに遠いのだが、どういうわけか、私は、その距離感が理解できずにいた。

はずである。それが「嫌」だと「感じる」ようになったのはやつと我々社会が成熟してきた証なのである。本来は人間であれば「感情判断」より「知性判断」が優先されるべきであるが、残念ながら日本ではそれが「遅れている」のだ。「感情判断」が恣意的な歴史より作られるという「事実」に目をつむり、ありもしない「伝統」を錦の御旗にして多様性を否定する「平等否定主義思想」は継続的発展的社会を構成できない。そしてそれは「たんなる感情」には還元できないのである。さて結果として「新潮45」は事実上「廃刊」となった。総合月刊誌部門の発行部数では「文芸春秋」がダントツのトップであるがその中でも同紙は部数としてはその一割にも満たないがそれでも六位以内にはいつている中堅のおピニオン誌であつた。残念なのは様々な「感情」ではなく「意見」が戦わされる場が少なくなつたということである。本論でも検討したが「思想の自由市場」が健全性を持つれば「個人と社会」の調和は維持発展するという「理想」は大切であろう。そのためにはやはり個人の「自律」が基本になる。「自律」は「自立」として、個人が外からの何らかの利害や権力と結びついたたんなる「感情」に影響されずに「個と全体」とが調和するにはどのようにすればよいのかを自分の「意志」として考えることであると思う。「自由」はそのために存在する。

今回は、中国の仏教説話からの話し。鬼と交わった僧の運命はいかに・・・。教科書に出ない度は五／五。

ある僧、女鬼のために惑わされるが、法華経の靈験により命が救われた話し(巻第七 第十五)

今は昔、中国の周辺の国にさる山寺があり、その山寺に一人の若い僧がいた。常に法華経を誦読していた。ある夕暮れに、寺から出て行脚をしていると、女の食人鬼にであった。鬼はたちまち女の姿に形を変えた。その姿はすこぶる美形であった。その女が僧に誘いかけて戯れていた。この僧、たちまちこの鬼に心惑わされて、ついに情けを交わした。交わった後、僧の心は放心状態となり、正気を失ってしまった。

女鬼は、この僧を自分の住処に連れて行き、喰らってしまったおとと考え、僧を背負って空を飛んでいく。日の暮れになり一つの寺の上を飛びすぎた。僧は鬼に背負われていたところ、この寺の内から法華経を誦読する声をほかに聞いた。その時に、僧の心が少しさめて正気が戻り、心の中で法華経を唱えた。

するとどうだろう、女鬼に背負われていた僧の身体がみるみる重くなり、女鬼

は耐えられず次第に高度を落とし地面に近づいていった。とうとう背負いきれなくなり、僧を捨てて去っていった。僧は正気にもどって、自分がどこにきてしまったのか分からない状態であった。

しばらくすると寺の鐘の音が聞こえてきた。僧はこの鐘の音をめざしたところ、一つの寺に至り、その門を叩き、門を開く。さらに寺内に進み、出てきた者に詳しく事情を語った。この寺の僧たち、これを聞き「この人はすでに女犯を犯している。我らは同座をするわけにはいかない」と主張した。

\*

そのとき、一人の長老の僧が言うに「この人は、鬼神に惑わされていたのだ。これはこの人の本心ではないはず。ましてや、法華経の靈験が示された人だ。されば、早々に寺に住ませるべきだ。」と言って、僧に女鬼を犯した罪を懺悔させた。この僧、元の寺について語ったので調べてみると、離れること二千里余りであった。その後僧はこの寺に住み着いていたが、偶然に元の寺の国の人に出会った。この人、その経緯を聞いてこの僧を元の寺に帰したのだった。

これを考えるに、法華経の靈験は不可思議である。女鬼がいて、僧を喰らおうとして、その住処にさらい、背負い二千里余りの間をあとと言う間に、飛んで渡るといつても、僧は法華経を唱えたため

に、たちまちにして重くなって捨てられたこと、これ驚くべきことだと、語り伝えられたことだ。

《コメント》

「今昔物語集」の前半部分は、天竺・震旦(インド・中国)部です。これらには当然、典拠があり、その焼き直しであるのは仕方がないところですが、天竺部は釈迦の生涯から、様々な仏教説話、震旦部は中国への仏教の伝来から、仏教関係の説話、さらには史記にも登場する中国史の英雄や、孔子や荘子のエピソードなどから成っています。

これらの話しも多くは現代の私たちに初めて接するものも多くて新鮮に感じます。それになにより想像以上に生々しく、人間くさくて、私は好きです。

この話しでは、僧を誘惑する女鬼が、妙に艶めかしく、想像をかき立てられます。

また鬼が背負った者が重みを増してくるとは、子泣き爺や産女の幽霊などが国の昔話によくあるパターンなのは、興味深いところですよ。



京都大学原子炉実験所に勤めていた小出裕章さんが原子炉に入り、仕事をし、原子炉から出る時にクリアしなればならない基準値を上回る汚染を栃木県北部に当たる日光は受けたと前回書いた。

栃木県北部の「少女かさねとの出会い」のあった那須野を通り、いよいよ旅の目的地のひとつ「白河の関」へと向かう。「みちのくの玄関口」である「白河の関」は福島県である。東北新幹線の「新白河駅」で降り立つ。JR東北本線「白河駅」とは約一キロの距離である。「新白河駅」構内には「みちのくの玄関口」にふさわしく「おくのほそ道」を案内する立派な展示物があつた。「新白河駅」の前には芭蕉像も立っている

ところが、ウィークデーであるにしても、「新白河駅」から「白河の関跡」に行く路線バスは朝の一本、夕方の一本しかないのだ。既に朝の一本は出た後であった。となるとタクシーに乗るしかない。そのタクシーは一台しかなく、私の前に五人タクシー待ちをしている人がいるとすると、五人の一人一人を目的地まで運んでは、また「新白河駅」に戻ってきて、次の客を目的地まで運ぶという有り様である。

つまり、立派な、「みちのくの玄関口」でありながら、「白河の関跡」まで到着するのに大変な時間を要するということがある。これは一体何事か？タクシーに乗っ

「白河の関跡」に向かう途中、「危険立ち入り禁止区域」の看板を幾つも見かけた。つまり、「放射能汚染地域」の中をタクシ―は走っているということだったのだ。

ようやく、「白河の関跡」に午前十一時ごろ着いた。「白河の関」は「みちのく」に入る三つの関所、日本海側の有耶無耶関、太平洋側の勿来の関の真ん中に位置する「みちのくの正面玄関」である。ここから桓武天皇の命を受けた坂上田村麻呂が「蝦夷征討」のために通った場所でもある。そのような由緒ある「みちのくの玄関口」として「白河の関跡」は三月の雪のまだ残っている場所に整備されていた。「白河の関跡」の土産物店に入ると客は私一人だった。一人だけの女性店員から、「おくのほそ道(全)」(ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 角川ソフィア文庫)とパンフレット「松尾芭蕉」(全日本家庭教育研究会企画 新学社発行 福田清人作 川田清實絵)の二冊を買った。ところが、このパンフレットの企画編集委員に外山滋比古の名前が上っている。外山滋比古といえば、東大・京大の生協書店でロングセラーを続けている「思考の整理学」の著者ではないか! なかなか力の入ったパンフレットであった。土産物店を出ると、白河の関の森公園が整備されている。その隣に、子ども向けのレジャーランドらしき施設もあったが、子どもは一人もいない。昼食の時間になったので、白河の関の森公園で花の手入れをしている男性職員に、「このあたりで地元の人がよく行くラーメン屋は

ないですか?」と尋ねた。一キロほど先に「ラーメン店」があるとのことだった。ラーメンを注文すると小鉢に「肉うどん」をサービスでつけてくれた。それが、また美味しかった。ラーメン店のおばさんに「白河の関跡」から新幹線「新白河駅」もしくはJR東北本線「白河駅」に行く路線バスは出ているかと尋ねた。「もう一本もない。」との返事。もし路線バスに乗りたければ、八キロ歩いて、商業高校前で路線バスに乗り、駅に向かうしかないとのこと。まだ、午後二時になっていなかったたので、私はテクテクと商業高校めざして、歩き出した。先ほどの花の手入れをしていた男性職員も「ラーメン店」で昼食をとっていたらしく、私を見かねてか、私が二キロぐらい歩いたところで、後から「軽トラック」で追いついてきて、

「新白河駅まで助手席に乗りませんか?」と声をかけて下さった。これぞ「天の助け」である! 私が助手席に乗ると、「会話」というか、その人は、あきらめの気持ちや、ため息、怒りなどが入り混じった言葉を、哀愁の気持ちを漂わせて、ポツリポツリと語ってくれた。そして目的地の「新白河駅」に着いた。その人の、すべての言葉がわたしの胸に響いた。多くのことを考えさせられた「白河の関跡」行きであった。「福島」は現在も苦しんでいるのだ。

次回から、十二月号の「松島」一月号の「平泉」、二月号の「まとも」へと「我がおくのほそ道の旅」は続く。

## B級サラリーマン渡世譚 (64)

明石 幸次郎

担当者の役割 (その17)

新館の正面玄関を出て、歩いて二三分のところは市場があり、鮮魚を中心に早朝から競りがあり、それが終れば、昼頃になると市場内は閑散としている。場内で店を開けているのは、数軒の乾物屋と八百屋、雑貨屋で、それに寿司屋、うどん屋、定食屋などの食べ物屋。他は古びた二軒の喫茶店が昼食に来る客を目当てに午後二時ごろまで開いていた。

四人は市場の東側から入り、魚の匂いが残る、水で濡れた薄暗い石の通路を通り、西側にあるうどん屋に向かった。店の前に来ると既に五、六人が並んで待っていた。

列の後ろに並ぶと、直ぐに、ダフ屋のおつちゃんが出すようなだみ声でおばちゃんに注文を取りに来て「はい、まいどー。兄ちゃん四名さん、何する?」と言ってメニュー表を差し出した。

K村は「ああ、カレーうどんとライス。四人とも!」と注文したら、おばちゃんが店に入り「お次四名さん共に、カレーうどんとライス!」と厨房に向かって、だみ声で伝達した。

何人かの客が出て行った後、待つこと五分位で、おばちゃんが「兄ちゃん四名さん、奥のテーブルにどうぞ」と呼んでくれた。席に座ると直ぐにコップに入っ

た水と四枚の大きな紙ナプキンがテーブルに置かれ、そのあと大きな器に入ったカレーうどんとご飯がテーブルにドーンと置かれた。

四人はそれぞれ、服にカレーが飛んでも大丈夫な様に、前掛けの様な紙ナプキンを着けて食べ始めた。店の前には、引っぱり無しに、客が並び始めていた。

K村は「ここは、いつも出てくるのが早いわー。その代わりに、客が喋りながらゆっくり食べていたら、おばちゃんに睨まれ、早く食べて出て行き!」と言われそうや。N川、喋らずに、早く食べるよ」と忠告しながら、黙々と食べ始めた。

K久保は「N川さん、大阪は注文してから、出てくるのが、早いですね。その中でも、ここは、特に早いですね、何か慌しくて食べても落ち着きませんか?」

「そうだね。旨いが、早く食べると急がされている感じだよ」と答えた。

K村は食べるのが早く、額に汗を掻きながら時々ハンカチで汗を拭い、十分足らずで、食べ終えかけた時「N川、この四人でアマダしようか?」と声を掛けたがN川はその挑戦に乗らず「又、負けるので、今日は止めておきます!」と、きっぱりと断った。「そうか! ダッチアカウントでいいか。隣の喫茶店にいるわ」と言って、さっさと、自分の勘定を済ませ、出て行った。

明石はK久保に「K村さん、食べるのが早い、歯で噛んでないのと違う? 胃

に口から、直接押し込んでいるような感じに見えたが？」と質問したら

「そうです。歯で余り噛むと、胃と腸が怠けて働かなくなる、と言っているのがあの人の自説です」と答えた。「へー？そんな理屈は始めて聞いた。一般的には、良く噛んだ方が、胃で消化しやすく、腸にも負担を掛けず、吸収し易くなり、身体に良いと言われているよなあ」と言う。「K村さんは、逆なんですね。医学的な根拠は分かりませんが、歯が働き過ぎると胃が働かなくなり、胃のためにならないと言っているのがK村さんの考えです。食べるのも早いし、仕事も早い、残業なんか、入社以来したことがないらしいですよ。曰く、午前と、午後に一時間集中して、問題を片付け、あとは、情報収集と称して、社内散策？か、外に出て行くのが、あの人の仕事のやり方です。まあ、独特ですね」と喋っていたら、おぼちゃんを目と目があって、喋るのであれば、早く食べて、隣の喫茶店に行っておいで！と言う顔をされた。

三人は、ただただ、器に入っているカレールードンの中に放り込み、時々、コップの水を飲みながら食べ続けた。やつと、食べ終えて、額の汗をハンカチで拭きながら、勘定を終えて、隣にある喫茶店に入った。

K村は四人掛けのテーブルで、バナナジュースを飲みながら、週刊ビッグコミックを読んでいた。三人は、席に座ると、直ぐに出されたコップの水を飲みホッ

コーヒーを頼んだ。店の姉さんが明石の顔を見て「あら、お久しぶり、戻ってきたはったん？」とにっこり笑って話しかけた「そうです。工場で首になり、出戻りですわ！」「そう、戻るところが色々あって宜しいね、私に戻ってきたら、ここしかあらへんさかい、妹と相変わらず二人でやっていますね。ホット、スリー」と妹に向かって言った。K村が「明石、お前、ここでサボってたんか！堺工場の前は何処におったんや？」と尋ねられた。「本社資材部に五年居ました。その後、堺です」

「そうか。資材部に居たら、ニューヨークにいるS尾さん知ってるか？」「良く知っています。S尾さんが私の新入社員の時の指導員です。ここで、昼食の後、コーヒーを飲みながら、よく喋っていました」「はっはっはー。そうか、エライ人に指導してもらったなあ。俺の大学の先輩や。よく喋る、面白い人で、英語も上手いなあ。よく喋る人は、外国語のマスターも早いらしいで！この二人もそうや。N川なんか、電話ですつと喋ってるわなあ。M商事のK口と英語で喋った方が、電話も短くて、お互いの意思も通じると違うか？」とN川の方に話題が振られた。その後、香りが高く深みのあるコーヒーが三人の前に置かれた。カレールードンの後の、ここで飲むコーヒーは最高に旨くて、午後からの仕事もこのコーヒーのカフェインの効能か、眠くならなかった。

## オクラの山たより (26)

困生

この「芥川たより」誌上でも俳句の作品を提出されておられる方がいらっしゃるので恐縮ですが、我が国の伝統的詩歌である和歌や俳句の起源が漢字と同じく中国であるという珍説のあることをみなさんは御存知でしょうか。

もちろん、この珍説が和歌の起源はサノオミコトがつくつたという「八雲たつ 出雲八重垣に」云々の歌であるとする俗説以上に怪しげな説であるには間違いないのですが、話としてはおもしろいので、紹介することにします。

時は十八世紀はじめ文政の頃。漢学塾として有名な大阪の篠崎小竹塾では江戸からの客人福地荷庵を迎えて詩会を開き大いに盛り上がっていました。ワイワイとにぎやかな最中、突然、荷庵が「諸君、諸君は和歌の起源を御存知ですか」というクイズまがいの難題を持ち出したのです。はたして参加者一同がその答えに困りはてたとみると荷庵は「実はその起源は中国にある。その証拠に『論語』の一節にこんな一節があるではないか。」といました。荷庵が言った「論語」の一節とは次の通りです。

司馬牛が 憂えて曰く 人はみな兄弟あれど われひとり亡し(原文は『司馬牛曰、人皆有兄弟、我独亡』『論語』顔淵代十二)

確かに、この「司馬牛……」を指折り数

えて各句の字数を確認していくと和歌の定型のスタイル五・七・五・七・七となっています。そこにいた人々は「さすがは江戸の才人、たいしたもの。」と褒めそやしました。もちろん荷庵が「ドヤツ」と得意顔をしたのは想像にたくありません。

ところが、ところがです。その一座にたまたま著名な漢詩人であり「日本外史」を著わした頼山陽が居合わせていました。才気と山気では人後に落ちない山陽。「笑止千万。かたはらいまし。この江戸もんが。」とでも思ったのでしょうか。すぐに反撃に出ます。「あいや、しばらく。それでは荷庵殿は俳句の起源を御存知か。」と山陽が出してきたのは「春秋左氏伝」の冒頭にある隠公伝の次の一節。

夏五月、鄭伯、段に 鄆に克つ(原文は『夏五月、鄭伯克段于鄆』鄆は地名。一文の意味は鄭伯が段に鄆の地で勝ったということ)

これも字数を数えれば、五・七・五と見事に字数が揃っています。しかも立派に季語まであるではありませんか。字数だけでなく「夏五月」と季語までつけられたのでは勝敗の行方は明らかでしょう。福地荷庵の天狗の鼻が見事にギャフンとへし折られたという形とあいなつたとか。

いささか自らの才に溺れたといえる福地荷庵とは、実は明治初年の有名な新聞人でありかつ風流才子でもあった福地桜痴こと福地源一郎の父親。福地荷庵は一介の町医者でありましたが、若い頃は才気煥発で漢学にも造詣が深く江戸や大阪

の漢学塾を往来し、漢学者仲間と広く交流していたそうで、この話も交友録の「コマ」ということでしょう。

この荷庵のエピソードは江戸時代後期の決して政治的ではありませんが、漢学・漢詩文にもとづく書物・文芸的作品をコミュニケーションの媒介として作られていた日本全体の文化人・知識人の横のつながり（難しい言葉で文芸的公共性というのだそうです。政治的公共性はこの後に成立するんだとか。ドイツの社会学者ハーバーマスの説だそうです）とでもいっべき中で起きたエピソードでありましょう。

ここで、いささかネタバラシをしますと、この話は福地源一郎が父親の自慢話を語った中にあるもので、評論家の中野好夫氏によると彼の弟子の塚原洪祐園が書き残したものだということですが、さて、のつけからとんでもないヨタ話に付き合わせてしまいました。目立ちたがりの福地荷庵が和歌の起源のことを言い出したのに、日本において漢詩隆盛のきっかけを作った人は誰かを問わなかったのはなぜか。考えてみると少し不思議ですが、理由は簡単です。それは正史である「日本書紀」にそのことがはっきりと書かれているからです。

「日本書紀」の巻第三〇「高天原廣野姫天皇（持統天皇のこと）」に天武天皇の子である大津皇子についてつぎのような記述があります。

長ずるに及びてわきわきしくて才学あり。もつとも文筆を愛したまふ。

詩賦の興り大津より生まれり。

成人後は分別よく学才に優れ、特に文筆を愛した。詩賦が盛んになるのは、この大津皇子からである。

詩賦とは長短ありますが要するに漢詩のこと。これによると我が国の漢詩隆盛の始まりは大津皇子ということになります。

この「詩賦の興り大津より生まれり」という皇子の讃辞ともいえる語は、実は大津皇子が天武天皇の死の直後に謀反を企んで刑死したという記事の直後に書かれています。

悪逆非道の謀反人を褒め讃えるというのは権力者の立場から書かれる歴史書としては不思議なことです。

しかし、「日本書紀」が成立した八世紀初めにおいては「我が国の漢詩の始まりは大津皇子」という認識が詩歌を愛する当時の人々の間においては常識化していたのでしよう。

この我が国の詩賦隆盛の始祖といわれる大津皇子と彼の漢詩にまつわる事柄について以下の文章で触れてみようと思います。

## 二

実をいうと大津皇子の漢詩は「懷風藻」に収められた四首しかありません。そのうちの「述志」は前半部分だけの七言絶句であり、性格にいえば三首半ということになるのですが、その中で最も有名なのは「臨終」と題する詩でしょう。原詩の後に書き下し文、その後には口語訳を

《》に記します。

金鳥臨西舍

鼓声催短命

泉路無賓主

此夕誰家向

金鳥西舍に臨らひ、鼓声短命を催す泉路に賓主なし、此の夕べ誰が家に向かはん

《太陽は西に傾き、夕刻を告げる太鼓の音は自分の短い命をさらにせきたてるように聞こえてくる。黄泉の路には客も主人も自分一人だ。この夕べ、私は一人でいったいどこへ向かうのだろうか》

この漢詩と同時につくられたという短歌が「万葉集」（巻第三一四一六）におさめられています。

ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を

今日のみ見てや雲隠りなむ

磐余の池に鳴いている鴨を、今日限りに見て、私は死んでいくのか

この歌の詞書には「大津皇子の死されし時に、磐余の池のつつみに流涕してつくりたまひし歌一首」とあります。

「臨終」とは文字通り死を目前にしているということであり、また短歌の内容も作者が同じ状況にあることを伝えています。

大津皇子に何があったのか。「ころされる」とはどういうことが起きたのか、脇道に少し入りますが、その概要を記しておこうと思います。

## 三

大津皇子は天武天皇の第二皇子（「日本書紀」による。「懷風藻」によれば長子）でした。母は鵜野讀良皇女（持統天皇の姉である太田皇女であり、伊勢の斎宮となつた大伯皇女は同母の姉にあたります）。

事件が起きたのは朱鳥元年（六八六）のこと。その年の五月頃からの病が急に重くなつた天武天皇は九月九日について崩御しました。そして、皇后である鵜野讀良皇女が称制（先帝が崩御後に新帝が即位せずして政務を執ること）を始めた直後の十月二日、突如として大津皇子の謀反が発覚します。訴え出たのは大津皇子と深い親交があつた川島皇子（天智天皇の子）。どうも私的な宴席の場で大津皇子の謀反の意志を聞いたということらしいのですが、おそらくはちよつとした不満を漏らしたという程度のことであつたでしょう。

大津皇子は謀反発覚の日、即座に捕えられ、彼のために「あざむかれたる」官人・沙門（僧侶のこと）ら三十余人も一斉に捕えられました。そして、あくる十月三日、大津皇子は自宅である「詎語田の舎」で死を賜うこととなつたのです。時に皇子は二十四歳でした。

同日、大津皇子の妃であつた山辺皇女も皇子の遺骸の傍らで自害します。「日本書紀」は、その様子を

髪を被して徒跣にして、奔り赴きて殉す。

髪を振り乱し、裸足で駆けつけ殉死した。

と、その死をまるでドラマの一場面のよう  
に書き記しています。

この事件がまことに奇妙なのは皇位継  
承権が草壁皇子について第二位であり、  
草壁皇子と共に天武天皇を支えてきた人  
物の謀反という大事件でありながら、刑  
死したのは大津皇子ただ一人であること  
です。逮捕された三〇余人は流罪になっ  
た新羅僧ら二人を除いて後にすべて無罪  
放免されました。

このため病弱かつ凡庸で才芸もなく人  
望もない草壁皇子を何としても天皇に即  
位させたいとゴリ押しをする鵜野讃良皇  
后の「我が子かわいさの陰謀」だとする  
説が一般的です。

大津の死の三年後に発病し病弱であつ  
たらしくすぐに亡くなったこと。「万葉集」  
にはただ一首が収められているだけで  
「懷風藻」にいたっては作品がまったく  
残されていない、つまり文芸的な面での  
評価が低いこと。規則に縛られず豪放な  
性格で人々から慕われたとされる大津皇  
子に比して草壁皇子の人柄に関する記事  
が全く見られず影の薄そうな人物であつ  
たらしいこと。以上、いくつかの点から  
見てきますと、この事件の背後に鵜野皇  
后の焦りが確かに見えるようではありません。  
しかし、こうした「母の盲目の愛」と  
いったとらえ方に対して、もう少し多面  
的なとらえ方が多くの歴史家によって最  
近になってなされるようになりました。

まず、七世紀から八世紀はじめにかけ  
ては寒冷期ともいえる自然環境でした。  
「フェアブリッジの海水面変動曲線（海

岸線の前進と後退とから地球環境の温暖  
化と寒冷化を推計し古代の気候環境を知  
つていこうとしたもの」によると紀元二

世紀から三世紀、七世紀から八世紀、十  
二世紀から十六世紀（この四百年間は特  
にひどく中世を小氷河期と呼ぶ研究者も  
います）、そして十八世紀と地球は何回も  
寒冷の時期を迎えています。ですから大  
化の改新の頃から壬申の乱、そして、平  
城京が建設され律令国家ができあがって  
いく時期というのは寒冷期の劣悪な環境  
下であり、政治的には誠に不安定な時期  
危機の時代であつたといえるのです。

自然環境の上だけで不安定であつたわ  
けではありません。この時期はまだ後の  
奈良・平安時代のようなしつかりとした  
国家体制ができあがってはいませんでした。  
一人の大王（天武天皇以降は天皇）  
が崩御すれば流血を伴う後継者争いが起  
こるのはヤマト政権成立以来の恒例行事  
でした。人気のない後継者ランク第一位  
の草壁皇子に対して人望のある大津皇子  
が後継者を争う混乱の原因となる可能性  
は捨てきれません。

また、天武・鵜野皇后（後の持統天皇）  
の両者によって白鳳の時代は推進された  
といってもよいのですが、彼らの考えて  
いたあるべき「律令国家体制」という新  
しい国家イメージの中の天皇像とは何  
であつたかが問題となります。

中国的な専制的君主型の君主は体制の  
永続化を保証せず、むしろ易姓革命を引  
き起こす危険性と隣り合わせでした。一  
方、統治機構の一部となつて象徴的で超

越的な君主である方が国家の支配システ  
ムさえしつかりしていれば、むしろ皇統  
の永続化が期待できたのではないか。後  
代の天皇もありようを見ると天武・持統  
の二人の天皇の目指した天皇像により近  
いのは草壁皇子であつたのではないか、  
と思えてくるのです。事実、天武天皇の  
在世中、宮中の行事では序列第一位に必  
ず草壁皇子がいました。

日本の国家体制が英雄的な大王の時代  
から日本的な天皇の時代へと変わりつつ  
あつた時代であつたのです。天武天皇・  
鵜野皇后の考える新しい時代のリーダー  
像とは違い、昔を懐かしむ人々（政権内  
のいわゆる保守的なグループ）の持つリ  
ーダー像が英雄時代の大王像であつたと  
すれば大津皇子はきわめてきわどいこ  
ろに立っていたといえるでしょう。

以上のような客観的な大津皇子を取り巻  
いていた状況を考えていくと「我が子を  
何としても天皇に」という鵜野皇后の一  
途な思いだけによつて大津皇子の謀反が  
でつちあげられたというわけでもない  
という気がします。が、「日本書記」「懷風藻」  
「万葉集」以外に史料はまったくなく、  
たぶん鵜野皇后の指示によつて事が進ん  
だのは事実でしょうから、大津皇子が謀  
反の名のもとに捕えられるやいなやあつ  
という間に刑死したということだけを今  
は確認しておけば十分でしょう。

#### 四

さて、まず大津皇子の「死をたまわり

し時」に作つた和歌から見えていくことと  
します。

自分の死に際して和歌を詠むことは貴  
人という限定つきですが、辞世の歌とし  
て「いふん昔から我が国で行われてきたこ  
とです。古いところでは日本武尊の

「大和は国のまほろばたなづく青垣  
山ごもれる大和しうるはし」という辞世の  
歌があります。ですから大津皇子に辞世の  
歌があることは何の不思議もありません。  
もう一度、紹介しますと次の和歌です。

ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を  
今日のみ見てや 雲隠りなむ

皇子の悲痛な思いが伝わってくるよう  
な和歌ですが、日本文学研究者の小島憲  
之氏が「皇子の周辺の人の作が皇子の作  
として伝えられたのだろう」という説を  
出されて以来、それがほぼ通説となつて  
います。

理由は結句の「雲隠りなむ」という語  
です。「雲隠る」は人を尊敬してその死を  
間接的に表す表現（敬避表現）ですから、  
貴人が自らの死について用いるのはおか  
しい、ということがその主張のポイント  
です。

「雲隠る」の使用例を一つ出せば長屋  
王の一族が冤罪の罪で死を賜つた（七二  
九年に起きた長屋王の変）のを悲しんで  
倉橋部王女が作られた歌があります。

大君の命かしこみ大殯の時にはあ  
らねど雲隠ります

天皇の御命令を謹んで受け殯宮を営

むべき時ではないのにお亡くなりになつた」(『万葉集』巻第三 四四一)

この歌にあるように「雲隠り」は貴人の死を間接的に伝えるのが通例で自分の死について用いることはほとんどなく、このことから誰かが大津皇子に仮託して歌を詠んだというのが偽作・仮託説の主張です。

さらにいえば八世紀初めには大津皇子の死にかかわる「大津皇子伝説」のようなものが広く流布していたのではないかと、そして、それに従って大津皇子の和歌・漢詩が作られたのではないかと小島憲之氏は述べられています。

もつとも、こうした説については異論があり「万葉集」の中の辞世歌・臨死歌をすべて検討して敬避表現があるからといって他の人が作ったとはいえないということを主張する研究者もいるのですが、真作か偽作かについて、これ以上のことは筆者にはお手上げでわかりません。以下、大津皇子の漢詩については長くなりそうなので、次回に回します。

### 【補足】

#### 1 鷓野讚良皇女のこと

鷓野讚良皇女(持統天皇)は正確には鷓野讚良皇女と書くべきでしたが、「鷓」ではなく「鷓」の字を使っている文献もあるのが簡便な「鷓」の字の方を使いました。

#### 2 大津皇子と草壁皇子の歌

草壁皇子と大津皇子は一人の女性をめぐってライバルの関係にありました。女

性の名前は石川郎女。石川姓であることからすると蘇我氏の一族の女性でした。まず、「万葉集」の中にただ一首ある草壁皇子の歌から。後の( )は現代語訳です。

日並皇子尊の、石川郎女に贈り賜ひし御歌一首 郎女字を大名児といふ

大名児をもちかたの野辺に刈る草の束の間もわれ忘れめや(一一〇)  
(大名児を向こうの野原に刈る草の束の間も私は忘れることがあろうか)

何となく弱々しさも感じてしまう歌である。この草壁皇子の求愛にもかかわらず石川郎女は大津皇子のもとに行くが、このことを大津皇子は次のように歌う。

大津皇子ひそかに石川郎女を婚せし時に、津守連通そのことを占ひ露はせるに皇子のつくりたまひし歌一首  
大船の津守が占に告らむとはまさしく知りて我が二人寝む

(津守の奴めの占いに現れるだろうとは、先刻、承知の上で、私は彼女と二人で寝たのだ)

「性すこぶる放蕩、法度に拘わらず」と評された大津皇子の人物がよく出ている和歌です。二人の好対照ともいえる性格がよく示された二首を連続して並べ、しかもライバルに負けた草壁皇子の歌を後ろに置いた編者の意図がどこにあるかは筆者にはよく分かりません。気にはなりますが。

## 隠された歴史(1)

満田 正賢

はじめに

今月から邪馬台国があった三世紀以降近畿王朝が名実共に日本を支配する七世紀末までの日本の古代史に隠された歴史を、「隠された歴史」という題で綴りたいと思います。今の日本の歴史の教科書は記紀(古事記と日本書紀)の記述を元にした近畿王朝(ヤマト王権)一元史観によりまとめられています。しかし、記紀の記述には隠された部分があります。記紀は何を隠そうとしてきたのか、その内容を一つ一つ探ってみたいと思っています。

世間には「隠された歴史」の視点で書かれた書物は多くあります。その多くは「空想話」と卑下されたり、「謀略史観」など一面的な表現で紹介されたりしています。当初私はこのような傾向に陥らないようできる限り読者の皆様がうなずける内容を綴っていくように考えていました。しかし、途中でちよつと待てよと思ひ直しました。私はプロの歴史学者ではありません。古代史には若い頃から興味がありました。本格的に古代史に取り組もうと思ったのは長い間勤務していた会社を退職して大阪に移ってきたほんの二年前のことです。いわばホカホカのアマチュア古代史研究者です。そんな私が偉そうにこれが真実だと主張することはおこがましいし、そんな高飛車の主張は見向きもされないことにハタと気がついたのです。

それでは、私の話には何ら魅力がないのか私なりに考えてみました。私は「古田史学の会」の会員として、内部から古田武彦氏が提唱した九州王朝説を研究しています。一方で「古田史学の会」は古田氏の見解と違う考察も自由に発表できる開かれた部分をもっています。私はこの二年間、古田氏の見解と違う立場で古田史学の会の例会発表を続けてきました。そして会員仲間から多くの貴重な批判やアドバイスを受けてきました。それをまた糧にして自分なりに「隠された歴史」を考察してきました。古田史学を排除する歴史学会からも古田史学からもフリーな立場で古代史を語れるからこそ、何かが生まれてくるのではないかと私自身期待しています。

当然のことながら皆様が「空想話」とか「一面的な思い込み」だとか思われることも多々あることと思いますが、それはご容赦いただいて私の話をきいていただければ幸いです。

古事記と日本書紀に隠されたもの、これから話を進める上で、まずもって貴重な歴史史料である古事記と日本書紀のどこに隠された部分があるのかについて述べたいと思います。

### (1) 古事記

古事記は七二三年に太安万侶が元明天皇に献上したもので、その作られた過程は古事記序文に載っています。

(古事記序文の現代語訳抜粋)

「元明天皇は歴史や伝承に間違いや嘘が混じっていることを悲しみ、これを正そうと考へ、和銅四年九月十八日に臣安万侶に、

稗田阿礼が天武天皇の命で記憶していた歴史・伝承を書いて書物にするように命じました。臣安万侶は物語を編纂することになりました。」

この内容をすなおに受け取ると、古事記は天武天皇が稗田阿礼に記憶させていた内容を天安万侶が筆記したものととなります。

天武天皇は何らかの書物を手にして稗田阿礼に（自らではないにせよ）読み聞かせました。稗田阿礼はその内容をほとんど完全に記憶していました。非常に考えづらいのですが、世の中には超人的な記憶力を持つ人がおり、稗田阿礼はまさしくそのような人であったということです。古田史学の会・会員の萩野秀公氏は稗田阿礼は決して天武天皇の口述を筆記したのではなくあくまで記憶したのだという説を例会で発表しました。そして私はその説を支持しました。天武天皇は手にした歴史書の中で都合の悪い部分をカットして世に伝える為に、書物をそのまま残すのではなく超人的な記憶力を持つ稗田阿礼を見いだしてあえて口述した。そのように考えることが自然ではないかと考えたのです。

それでは、天武天皇が手にしていた書物とは何だったのでしょうか。

古事記の成立に関する代表的見方として岩波版日本書紀の編者である坂本太郎氏はこのように述べています。

「記紀は」両書ともに根拠の史料としたものは帝紀・旧辞である。古事記はそれのみに拠っているのに、「書紀」はそれ以外の史料を用いていることだけが違う。・・・帝紀は神代以来少なくとも推古天皇までのもの

が伝えられたが、旧辞は継体天皇頃で跡を絶つ。古事記は推古天皇まで帝紀の記録を残すが、旧辞は顕宗天皇の時に盛りを失っている事実からそのことが察せられる。・・・私は古事記と日本書紀を比較して、その源泉となった帝紀に大きな差異のなかったことを注意したい。〔史書を読む〕坂本太郎

一方古事記の成立に関しては異なる見方があります。

「本稿では」帝紀と旧辞について、帝紀を系統的記載、旧辞を物語の記載とみる通説をとらず、帝紀Ⅱ皇代史、旧辞Ⅱ神代史とする見方に立っている。・・・

（「記紀の成立過程について」・神崎勝「日本書紀研究第30冊」）  
そして帝紀は舒明期に完成をみた天皇記そのものであり、その内容は「古事記」中下巻にそのまま引き継がれていると考察しています。この神崎氏の考え方について基本的には私も賛成です。

「天皇記」は、六二〇年（推古一八年）に聖徳太子と蘇我馬子が編纂したとされる「天皇記」「国記」「臣連等の本記」の中の一書です。古事記の記述は推古天皇で終わっています。

おそらく天武天皇が手にしていた本は、神代史が綴られている「旧辞」と皇代史が綴られている「帝紀」だったのでしょうか。そして古事記の記述の対象時期からみて「帝紀」というのは聖徳太子と蘇我馬子が編纂した歴史書のうち「天皇記」ではなく「国記」ではなかったかと思えます。

日本書紀によると、六四五年（皇極五年）

に起きた乙巳の変の際に、「天皇記」「国記」「珍宝」が蘇我蝦夷の館とともに焼かれま

がったものと考えます。  
天安万侶は稗田阿礼の口述についてはその内容を改変してはいないと思われませんが、歴史書として最低限付け加えたい内容については、他の史料をもとに付け加えたものと考えられます。それが磐井の乱の記述であり、継体以降の不完全な各天皇の没年干支の記載であろうと思います。

後に詳しく考察しますが、私は、隋書倭国伝に記載された六〇〇年の倭王「日出處天子」阿每多利思北弧の国書奏上記事は通説でいう聖徳太子のことでも古田説のいう筑紫王朝の王でもなく「蘇我馬子が法興寺（飛鳥寺）の内部の充実の為に、筑紫王朝に圧力をかけて自ら「日出處天子」と称した国書を持参させたものがあった」と考えています。おそらく蘇我馬子は中国（隋）との接触を通じて、九州（筑紫）王朝の歴史を隠蔽し「神話時代から続く日本の支配者たる大和朝廷」のイメージを確立する必要を感じていました。それが六二〇年の日本（近畿王朝）初の歴史書編纂につながったと思っています。そして馬子はこの同時に蘇我氏と自らの功績を歴史に刻んだはずです。

日本書紀の特徴の一つに、仁賢天皇から推古天皇まで十代にわたり、その前の顕宗天皇まで必ずと言っていいほど記載されていた各種のエピソードが全く記載されず、王宮のあった場所と系図の紹介のみの記述となっていることがあげられます。（唯一の例外が継体記における石井（磐井）の殺害の記述です。）蘇我氏の功績は天武天皇にとつて削除しなければならない歴史でした。そのことが、仁賢天皇から推古天皇まで十代にわたる歴史エピソードの全面削除につな

がったものと考えます。

（2）日本書紀  
日本書紀は七二〇年（元正・養老四年）に完成しています。日本書紀には古事記と違つて序文がありません。しかし日本書紀には、六八一年（天武十年）に天武天皇が川島皇子以下十二人に対して、「帝紀」と「上古の諸事」の編纂を命じたことと記されています。これが七二〇年に完成した日本書紀の編纂のスタートであったとすると完成まで三九年かかったこととなります。又続日本紀には日本紀（Ⅱ日本書紀）の最終的な編纂は舎人親王が行つたと記述されています。日本書紀の編纂には多くの人がかかわり、多くの史料が参考文献として用いられたであろうことはまちがいないと思います。

とところで、前述した坂本太郎氏は「記紀で研究する前に記紀を研究しなければならぬ」と語っています。その言葉を受けて森博達氏が日本書紀についての画期的な研究を行いました。（古代の音韻と日本書紀の成立）森博達  
すでに本居宣長が「古事記」の万葉仮名

を研究し「上代特殊仮名遣」を発見していたのですが、森氏は「日本書紀」の中に仮名表記の違う二種類の歌謡をそれぞれ包含する二種類のグループの存在を発見したのです。森氏はそれをa群とb群と名付けました。a群の中の歌謡では単一の字音体系に基づいて仮名が表記されている。しかもそれは当時の北方音であり中国音そのものである。つまりa群の歌謡は日本語を中国語で音訳した資料であるとします。一方のb群には倭習(和臭)と呼ばれる日本固有の仮名遣い、本居宣長が言うところの「上代特殊仮名遣」で表記された歌謡が含まれています。倭習とは「所以」「則」「於」「之」など日本固有の漢字の「奇用」や、「有」と「在」、「者」「所」などの「誤用」、そして語順の誤り、否定詞の位置の誤りなどがある、当時の日本人の漢字使用の特徴です。ちなみに、a群は巻十四～二十一(雄略)用命・崇峻)、巻二十四～二十七(皇極)天智)です。一方のb群は巻一～十三(神代上)允恭・安康、巻二十一～二十三(推古・舒明)、巻二十八～二十九(天武上・下)です。

森氏はこのa群とb群の存在の理由を、a群は渡来した中国人が編集した巻であり、b群は日本人が編集した巻であると理解します。そしてa群の中に一部含まれる倭習は、日本人の手によって後から潤色・加筆したものであると推定します。そのような前提に立って「日本書紀の研究」をしようと森氏は提起しました。

この森氏のa群・b群という区分けを踏まえ、そこに新たな発見を付け加えて別の解

釈をしているのが国立天文台の谷川清隆氏です。谷川氏はa群とb群との関係で、日本書紀の天文記事の信頼性が異なること、a群の天文記録が観測に基づくこと、日本の天文記録が推古紀の途中(七世紀)に始まったことを示しました。そして、天群(七世紀のa群)のひとびとという新しい概念を提唱し、日本書紀の中に二種類のひとびとがいるという見方を提起しました。さらに天群にのみ屋久島との交流が記載されていること、「百寮」という表現が天群にあつて地群にないことを解明し、「天群のひとびと」というのは「旧唐書」に現れる「倭国」であり、a群というのは天群のひとびと(倭国)の資料を記載したものである。a群の中に現れる倭習の部分も天群のひとびと(倭国)の資料を一部分借用したものであろうと考察しています。(「日本書紀成立に関する一試案」・谷川清隆「日本書紀研究第30冊」)

古田史字の会・編集責任者の服部静尚氏は、a群とされる巻の中にも場所によってはわずかに、また違う場所では頻りに倭習が見られる、従ってa群は渡来した中国人が書いたものではなく、中国留學し高度の漢字の素養を身につけた日本人が書いたものであろうと考察しています。服部氏はa群及び倭習が多く見られる部分については九州王朝の書物からの引用であると解釈していますが、九州王朝の書物であるかどうかは別にしても、a群及び倭習が多く見られる部分は何らかの元資料をそのまま利用した部分であると判断することは出来ると思えます。

日本書紀の中には、大半が百濟本記の引用であり、日本の歴史書が百濟の歴史書かわからないような巻(巻十九「欽明」)や、中国史書の一文(淮南子・修務訓の聖王である湯王治績の文(集解))をそっくり盗用して天皇の聖王化を図った箇所のある巻(巻十一「仁徳」)などがあります。意図的かどうかは別にしても、各巻の編者が苦労して各書物を参考にして膨大な歴史書を作り上げた跡が読み取れます。

また、日本書紀には何らかの編集方針があつたことも間違いありません。例えば日本書紀全体を通して古代には存在していない「日本」という表記が使用されています。「ヤマトタケルノミコト」は古事記では「倭健命」と表記されますが、日本書紀では「日本武尊」です。地方行政組織の「コオリ」の表記には、発掘された木簡などによって大宝律令が制定された七〇一年まで間違いなく「評」という漢字が使われていたことが明らかになっています。日本書紀では大宝律令によつて制定された「郡」という表記にすべて置き換えられています。

日本書紀は、各巻・各記述を、その内容が真実の記録であるか、潤色・加筆・改竄した形跡があるか、又全くのフィクションであるか、何らかの資料の丸写しであるかなど、倭習の現れる頻度や特徴などを参考にして一つ一つ丁寧に吟味する必要があります。歴史書です。

投稿小説(連載)

見えない人 (1)

古城 悠

◆◆憂鬱◆◆

人は死を思った時に初めて生きることの意味がわかると言ったのは誰だったか。おそらく不幸を知った時に何が幸福だったのかが理解できるというのと同じニュアンスなのだろう。しかし誰の言葉だったかと問われると分からない。未だ生を知らず焉んぞ死を知らんは『論語』の章句だから孔子のものだ。生と死の順番が前後しているのはさておき、それらは合わせ鏡だとの認識は遙か昔からあつたらしい。生きるためだと言つて殺し合う人々の自己矛盾から人生の意義こそが差し迫つた問題だと訴えた現代の哲学者がいることも、知識として持つてはいる……脳みそに突き刺さる電子音に感覚を麻痺させながら、野田要は人生に関する思索を重ねていた。だが、いつしか、誰に向けるというでもない罵詈雑言が頭の中で大きくなつてくる。

「この糞虫が!、とつとと死にくされ!」

そうなのだ、生きるこの意味を考えるよりもっと大切なのは、この台が廻つてまわっていないことなのだ。国政以上に傘がないことを憂えた歌があつたそうだが、屁の突っ張りにもならない人生論より、回転効率の悪い遊戯台を選んだことの方が、いまは後悔すべき重大事なのだ。すべての元凶はおのが判断の拙さ、だから怨嗟の言葉が口を衝いて出る。当たりが来ないまでも液晶画面が順調に動

いているうちは人生を巡る哲學的考察も拂うのに、銀玉がチャッカーを通らず、無駄打ちが続くと焦燥感が増す。そうして世の中に向けられた呪詛の呻きが零れ始める。

毎朝 同じ時間に出社して業務日誌を確認する。営業社員一人ひとりに義務づけられた備忘録兼用の報告書だ。引き継ぎややり残しを担当の本人が確認するだけでなく、仕事の進捗を管理側がチェックするのにも使われる。出社してまずこのノートを開くのは、いわばルーチンのようなものだ。一通りは頭に入っているのだが、至急の用件が飛び込んできたら他は優先度の低い順に意識の外へと追いやられていく。日誌の確認をルーチンに入れておかねばならないゆえんだ。午前中は社内業務で費やされ、午後は取引先の販売店を訪れることが多い。出先では、自社製品の評判を聞いたり、目立つ陳列を提案したり、新しい注文を取ったり、理不尽な苦情にペコペコ詫びたり、どうでもいゝ世間話に付きあったり、心にもない世辞を並べたり等々。そして時間が余ったからといって銀玉遊技場に向かう。

要は思っている「まあ、いいさ、誰かに咎められるわけでもないし、割り当てる仕事はきちんとやっているんだから」と。こんな毎日になんか意味があるんだらうなんて思わないわけでもない。哲學的考察の対象にならないのはわかっている。それでも日々の糧を得るためのルーチンだと割り切れば納得はできる。いや、諦めはつく。まわりのみんな、もつと言えば世の中の人すべて、そう思っているはずだ。男であれ女であれ、若者であれ年寄りであれ、金持ちであれ貧乏人であ

れ、日常はルーチンの積み重ねによって出来ているなんてことは、わかりきっていることなのだ。なのに何かもつと刺激的なことが起きないものかと望んでいる。くそつたれめ……駄目だ、落ち着かせよう。ほんの少し油断しただけで相手を選ばない悪口が頭をもたげてくる。見境のない悪態を突く自分がそこにいる。ふうと大きく一息ついて、ハンドルから手を離す。そして立ち上がろうとした時、ものの弾みでコーヒーマシンの空き缶が床に落ちてカコンと音を立てた。

樹脂系の床材が貼られているので反響したわけでもない。それにたくさんの遊戯台から発せられる電子音やホール内のけたたましいBGMに紛れてしまう程度の音だ。足下に空き缶が転がってきたことに気づく人もいないだろう。そう思うと、黙って転がるままにしておこうかと思つたが、世の中に迷惑をかけるのは心の中で垂れ流す毒だけ充分だ。転がっていった方向を見定めてこちらに向かい、小さくしゃがみ込んで空き缶を拾う。それに併せて近くに落ちていた銀玉を一個三個。

と、その時、要の目は、同じ玉に伸びてきた手を捉えた。空気が粘り気のある液体に代わったかように感じられたのは、差し出したこちらの手に驚いて向こうも同じように息を詰めたのだろうか。視線を上にあげると、冴えない風貌の大学生っぽいのがギョツとした様子で固まっている。

「よ……四谷さん……なんでここに……」  
「それはこっちのセリフです。一度と会えないものと思つていましたが、お茶でもどうです？、おこつてくださいね」

あらかじめ示し合わせていたように、阿吽の呼吸で交わされた掛け合いだった。しかし要した時間の短さとは裏腹に、伝える情報量の何倍何十倍もの疑問が湧いている。まず、この掛け合いは誰と誰との間で行われたのか。一つの銀玉を挟んで冴えない大学生と相対したのは覚えていて。そしてその流れで聞こえてきた掛け合いであるのは確かなのだ。どの言葉が誰が発したのが判然としないう。この掛け合いが、マンガの『めぞん一刻』の中で行われたものと同じであることは、すぐに思い当たった。そのことを前提として受け入れるのなら、すなわちフィクションが現実に投影されたというのなら、口ごもりながら「四谷さん」と言つたのは目の前にいた大学生だ。そして、そのセリフがこちらに向けられた以上は、自分自身が四谷氏その人であり、「お茶をおこつてくださいね」とねだっているらしい。要には、口を動かして何かをしゃべった自覚はないのだが、それ以外の可能性は考えられなかった。

マンガに描かれた作中世界が目の前の実際として起きたのはどうということかというところからして理解の範疇を越えているが、百歩譲つてそれを認めたとしても、自身がマンガの登場人物になつているというのは突拍子すぎる。また一方では、掛け合いが耳に入ってきた瞬間、起きていることを高いところから鳥瞰しているようにも感じていた。いわゆる読者視線というヤツだ。フィクションの登場人物であると同時に、フィクション世界を外から眺める読者でもあるなんて妙な話だ。

そっだ、妙な話なんだと思つた瞬間に空気が

が軽くなる。冴えない大学生、もう五代くと名前でも呼んでもいいと思つたが、フィクションの登場人物である五代くんの姿も見えない。指先、数センチのところにあつた銀玉は、依然、同じ場所に転がっている。どうやら一瞬の白日夢だったらしい。床のパンコ玉を拾おうとした行為が、フィクションの設定と重なつたものだから、登場人物を勝手に呼び出し、あまつさえ登場人物に同化してしまつたのだろう。そんなことが起きるのかなんて問うても始まらない、実際に起きてしまつたんだから。それにしても、どうせフィクションに入り込むのなら伝説のアイテムを手に入れて五臓六腑の、じゃなくて八面六臂の大活躍をするヒーローの方がよかつた、と要は考える。そうすればもつと刺激的で楽しくなつていたのに、よりによって天下御免の怪物、四谷氏だったとは笑うに笑えない。

そもそも、誰でも知つているマンガ作品が最初にあつて、そこに描かれている世界に入りこむというだけなら、いわゆるオタク君やオタクちゃんのナリキリだ。MANGAやCOSPLAYのように、海外に輸出された日本語でサブカルに起源をもつものの中にはNARIKIRIが含まれるとの話もあるくらいだから、そんなに珍しいものではない。いずれにせよ、白日夢だったわけだ。

#### ◆吾輩は誰であるか◆

奇妙な形でケチがつけられたように思えて、要はホールを出て家路についた。ルーチンに従うなら、油を売った売らなかつたに關係なく、一旦は会社に帰らねばならないところだ。会社に帰って業務日誌にその日のあら

ましを記録する。そうすることで一日の終了を確認するのである。だがこの日は、急用が入ったように装って直帰にする旨の連絡を入れておいた。

「まあ、いいさ、サボったところで誰も追及したりしない。山田なんか、二、三ヶ月おきに親戚の叔父さんか叔母さん、年の離れた兄弟姉妹が死んで立て続けに忌引き休暇を取っているんだ。鈴木課長の日誌チェックなんて所詮は形式的にやっただけなんだし、気にした方が負けだ。」

要は、わざと声に出してみた。ショーウィンドウに映った自分の顔に向かって、一言ひとことを言い聞かせるように語りかけたのである。

と、その時、何かが違うなという、どこか座りの悪さみたいなものが感じられた。先ほどの白日夢が始まる時に感じたねっとり感とはまた違う、背中あたりをムズムズと何かが這い上がってくるようだ。ガラスに映った顔は、心配そうな眼差しでこちらを眺めている。だがその顔は、見ず知らずの上その人のように見えなくもない。

「俺って、こんなだったっけ？」

ガラスに映った心配げな表情を問うのではない。もしかすると、そっちの方が大切だったのかも知れないが、それを押しつけての第一声が俺って？であった。「人は死を思った時に初めて生きる」の意味がわかる」と言うが、それなら他人を知って初めて自分が理解できるという理屈も成り立つはずだ。だが、それ以前に、ガラスに映っているのが自分なのか他人なのかわからない場合はどうすればいいんだろう。

もう一度、ガラスの顔を凝視する。こんな顔だったよな、それは自分の目であり、自分の口だ、確かにそうだ、間違いない……と念を押せばそのように思えてはくる。しかし、なんか違うんだよなと考え始めると、輪郭にせよ、鼻の形にせよ、自分のものとは思えなくなる。ゲシュタルト崩壊とかいうヤツなのか。二度、三度、目をパチパチやってみた。一瞬で見えているものが変わっていた。

ガラスの顔は消えている。そもそもショーウィンドウが視界の範囲には存在してない。やたらに目につき耳につくには、舗道の敷石であり、疾走する自動車が残す轟音や音響信号が奏でる電子音だ。舗道の色合いは吐き気を催すぐらいに毒々しく見えるし、車の音にしても信号の音楽にしても鼓膜の許容量を超えているのではないかと思うほど耳障りだ。いままでいた場所と違うところへやってきたわけではないのは、感覚がそう教えてくれている。ただ見えるもの、聞こえる音が悉く違っている。見えているものにしても、聞こえている音にしても、それ自体は変わらぬのに、見え方聞こえ方が変わったとしか思えない。いろいろなものが大きく見えるし、高い場所にあるように映る。そしてそれらが上からのしかかってくるように感じられる。「おい、その名なし！、御めえはここがどこか知ってやがんのかい、こん畜生め！」

「さあて、どこなんだらうね」  
べらんめえ口調でやたら乱暴に怒鳴り散らす声と、それを超然と受け流す声が聞こえてくる、というより、先ほどの白日夢と同じで片方は自分が発したかのように思えてならない。それで振り返ると、目の前で巨大な

猫がこちらを睨んでいた。人の身の丈を優にしのぐ巨大猫だ。

だが、その姿を見るや、一切の事情が飲み込めた。巨大猫ではなくて、こちらの身体が縮んでいて、相対的に大きく見える猫がいたに過ぎない。そして小さくなったこちらの身体も毛むじやらの猫になっていて、先の掛け合いは猫同士の会話だったのである。しかもセリフに反応して瞬時にマンガの『めぞん一刻』が思い当たったのと同様、この時も掛け合いを耳にして間髪いれず一つの小説名が閃いていた。『吾輩は猫である』だ。

目の前の大きな猫は「車屋の黒」と呼ばれている乱暴者だ。その黒から「名なし」呼ばわりされたところをみれば、今度は主人公にキャストイングされたのだろう。脇役やチャイ役ではなく真正正銘の主役だ。作品冒頭で「吾輩は猫である。名前はまた無い」と語り出す、日本文学史上で最も有名な、かの猫氏である。

異世界転移？、そんな単語が要の脳裏をよぎった。気がつけばモンスターの跋扈するワンダーワールドでといったパターンが模範的な異世界転移だとすれば、そんなにすつきりしたものではない。しかしNARI IRI IRIが度を越してマンガの世界に完全に入りこんでしまうのも異世界転移である。また目の前で展開されているケース、すなわち虚構の動物キャラが歩き回っているのも異世界といえは異世界だろう。ともあれ、かの高名なる猫氏が車屋の黒とともに現在の時空に転移し、加えて猫氏の方に要の意識が宿っているらしい。

「世の中、ひっくり返っちまったみてえだな

騒々しいつたら、ありやしねえぜ。何なんだよ、ここは」

「それは吾輩にも分からない」

黒が状況を飲み込めないのは当然かも知れないが、吾輩と猫氏もまたわからないと言っているのはどうということだろうか。猫氏には要の意識が入っているのだから、二匹がもともと存在していた明治の御代から約百二十年後の世界に来ていることは容易に理解できそうなものだが、要の意識では猫氏の言動を左右することはできないということなのだろうか。事実、吾輩と猫氏は、普通の猫がよくやる顔ふきや背伸ばしを至極当たり前に行っている。もし要の意識が猫氏の行動をコントロールするのであれば、本来が人間であるわけだから、猫らしい所作が自然にできるか不安になるはずである。

思えば、四谷氏になった時がそうだったように、要が体験している転移は、フィクション世界のキャラクターになると同時に、その世界を外から眺める存在になっている。ここできているのは、明治時代の猫二匹が転移してきた二十一世紀世界を、要の意識が高いところから眺めつつ、同時に猫氏の中に入っている、と整理できる。ここまでは、量子論と超ひも理論を足して二倍するぐらいの複雑怪奇な新理論を持ち出さないと説明はできないはずだが、要はまだ落ち着いていない。先ほどの現象が白日夢だったという形で解決できたように、吾輩と猫氏となった今回もまた、何か妙だなと思えば、その瞬間にもこの世界が戻ってくるはず……

「御めつちはよ、だから吹い子の向う面だったんだい、何暢気に毛づくろいなんかしてや

がんでえ、この呆助、ちんけえとー」

黒の悪罵が飛んできた。もとの世界には戻れなかつたらしい。改めて、これは妙だ妙だとお題目のように繰り返すものの、何も起らない。そして、裏切られた期待を感覚レベルでわかりやすくしてやるとばかりの勢いで、要の中の焦りは大きくなつていく。もしかして、このままずっと猫で居続けないといけないということなのか？

「どうしたものでらうね」

零れたのは猫氏の言葉である。猫氏がその高踏的な口調でこれからの立ち回り方を思案しているのだ。この世界では、言葉を発するのは、猫氏や黒のように、実体的な肉体をもっているキャラクターである。要が中に入っているにしても、会話は猫氏の口調で行われるし、発想そのものも猫氏に寄り添う。要は、フィクション世界におけるいろいろな言動の受け手になることはあつても、展開に意思を反映させることはできない。体験はできても介入はできないのだ。それゆえに、黒がまぐし立てた悪態に応じるものではなく、もとの世界に戻れないのかと焦り始めた要の心そのもののように聞こえた「どうしたものでらうね」は、なんとも奇妙きてれつな発言に聞こえたのである。

と、その時、目の前でこちらを凝視する顔がガラスに映っていることに気づいた。先ほどまでは目の届く範囲にはガラスはなかったはずだ。しかも映っているのは人の顔であつて猫ではない。意図的に大きくまばたきをする、ガラスの顔も同じようにパチクリする。要は、ガラスの顔をしばらく眺めた後、目だけでなく、口を動かし、頭を傾け、いろ

いろなポーズを取つてみた。それに応じて向こうも一つひとつを忠実に実行している。ガラスに映るのが自分の顔であることを確認しても、もとの世界に戻つて来られたらしいと安堵した。

四谷氏になつた時と同じように、こちらの世界における時間の経過はほとんどゼロのようだ。要は可能性も含めてさまざまに考えてみた。二度の現象が白日夢だというのなら、それでも構わない。しかし白日夢であるにしても、生々しい感覚を伴つていたのは確かであるし、それだけでも普通の空想や妄想ではない。経験を共有する第三者がおらず、ただだけ詳しく、そして熱心に説明しても、空想や妄想以上の扱いにならないのは残念なのだが、裏を返せば一人での秘かな楽しみにすることができるといふことだ。客観的に認めてもらえないのなら主観的に楽しめばいい、それだけの話である。最初からそう割り切つておけば、他に迷惑をかけるわけでもないのだし、存分に楽しめる。

とはいえ、二つばかり条件をつけねばならない。一つ目は行つた先からきちんと戻つて来られること、これが保証されていないと楽しみどころではない。だが、この点については概ね大丈夫だろう。というのは、一度の転移ではこの現象を心の底から不思議だと思つた瞬間に世界はもとに戻つていたからである。四谷氏になつた時もそうだったし、猫氏になつた時も、結局は不思議に対する本気度によつて戻らないが決定された。戻ることを期待して、わざとらしく不思議だ不思議だと繰り返したところで何も起きない。それに対して下心なく本当に不思議だと首を

傾げた時には、たちどころにもとの世界は回復されていた。仮に転移を司っている誰かがいるのだとすれば、心の奥底まで見透かされているわけだ。転移のトリガーがわからないのも気がかりではあるが、帰還条件がわからないことには比べれば些細な問題だ。行きはよいよい帰りは怖いのが最悪なのであつて、帰る方法さえ確保できていけば行き方はものもの紛れでもひよんな弾みでも構わない。二つ目は、行き先をある程度は選択できること。フィクションの世界に入りこむのであれば、フィクションから呼び出されたキャラクターが実在する現代であれ、それらに対する選択の自由が欲しい。ピンポイント指定でなくても方向性ぐらい選んばせてもらえると嬉しいのだが、はたしてどうだろう。ともあれ、確実な帰還方法と行き先選択権、これらがクリアされるのなら、さぞや……と考えたのである。

(続)

## 編集後記

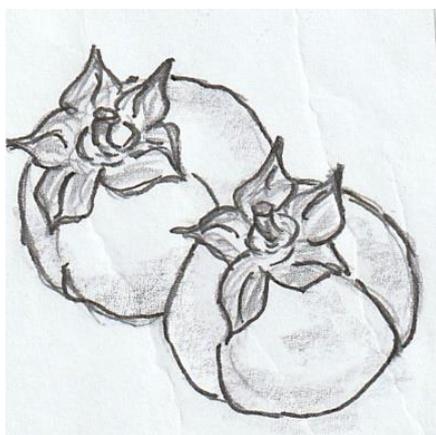
「一瞬」「みるみるうちに」

七月二十四日、二〇〇人を超える人命を奪つた西日本豪雨、中でも愛媛県那賀郡の氾濫はすさまじかつた。上流のダムも放流も重なり九人の死者が出た。

私の店の常連である伊藤さんから、ご主人の実家が氾濫した野村地区にあつたので家の二階まで浸水し何もかもが泥にまみれになった様子を聞いた。

豪雨の後、すぐに高槻から車で西予市に向かうが道路が通行止めで大変時間がかかり、実家に着くと大きな家がメチャクチャになつていた。すぐに近所の人たちに助けられながら、家財道具を決められた捨て場所に運ぶ作業が始めるが、泥まみれと夏の暑さでなかなか作業が進まない。一週間ぐらいではどうにもならず、何度も通う。

家具などを運ぶボランティアには、家主の指示が必要だから、現場にいなければいけない。伊藤さんは、作業中に腰を痛め手を骨折された。どきどきの作業で冷静な判断も出来ず、新しい着物や服などもよく見もせずすべて捨てたので、今になって後悔しているとも話される。「親しかつた人もなくなり、一瞬で二〇戸ほどの集落は消えたが、もう一度小さな家でも建てて余生を暮らしたい」と。この地区の人の温かさ自然のすばらしさに強く魅かれるそうです。高槻から西予市は遠いが、人を引き付ける人情や人間関係があるのだ。田舎大好きと言われる伊藤さんは、きつとこの村のマドンナ的な存在だったに違いない。たまに訪れる人気者だったのだ。



水の歌 (その2)

前回に続いて、水の歌 (その2) は鈴木英子歌集『月光葬』からの抄出。

ゆつくりとひろげれば蝶はいきなり

極彩色のみずのありかへ

十月いし世を忘れざるあかしとて

まなこにいまもいただく水色

せかせかと水母が波を縫うような

驟雨の街が眼下を動く

東京の水渡りゆくゆりかもめ

この日も一生と墨色に啼く

トラックは怒れる水をはねあげて

ぐったりわれの半身も水

仰向きてわれの飲むものまた明日も

飲むものうるむこの油月

阻むものなき時間なり水に棲む

ものらは水の呼吸に眠る

天竜をなだめるダムかだうだうと

水の力を聞くに至りぬ

水に力、確かにあると思いきり

泣ききりしのち力生まれき

ひたすらに落ちてゆく水みずからの

力に落ちて力生む水

ぐいと身を乗り出し水の底を見ん

眼球を撫でてゆく水の風

大川にさくらが零すゆめのいろ

水にはゆめを喰うものが棲む

橋をゆくころはあやし水の上を

すすつと大きく滑れる気をする

一本の川を腕に抱え上げ

私は水の支配者たらん

水のなかで私は何かを待ち続け

待つものきたらず水吸い込めり

橋在ればある橋の下 ほっこりと

空気溜まりてひとの巣となる

入館しペットボトルを取り出だす

まず生きる水を大切に汲む

身に巡るみずを揺すらせ身をのぼす

次の世いかなるかたちのわれか

ひとつ水にゆらりいのちを浮かせて

舟にいる一期一会の時間

悠々の川なれどかつて火を背負う

人にあふれき東京の川

どこへ行くにも橋を越えねばならぬからわたしはここで紡ぎ続ける

どこへ行くにも橋に彼岸へ渡される

雨の日は雨の温度となりて

手放せばいずこまでも流れゆく

この世わたしを留めるものなし

橋の上で手を合わせいる横顔の

そのひとこそが亡きひとのよう

置かれたるまま少しづつ彼岸へと

いのちを移す橋上の花

これらの短歌を読んで、山椒魚はゴクンと水を一飲みした。水は命を育み、命は水によってつながる。その水の流れの中を人は生き、生きるために橋をかけ、橋を渡る。この歌人の水に向ける目は、この世界を生きる人間に向ける目であり、人間が生きる世界そのものに向けられた目である。歌集には、水の歌のほかに人間とその世界を詠う多くの歌が収録されていて圧倒される。



俳句

土田 裕

天になき国境の壁鳥渡る

空室の目立つ社宅や秋灯

黄落の空を蹴り上げ太極拳

霧深し廃炉への道まだ見えず

温かき母の香りや茸飯

影山 武司

未読の書埃を払ひ後の月

逆さ富士漣に消え鴨来る

すすき原モーセの海のごとく割れ

空深し遠流の里の木守柿

縁側に野良着干したり柿紅葉

閻魔像覗く小窓や秋深し

冬来たるひと筆書きに富士描き

小春日の日を撥ね返す鎧武者

冬天へ大槌振るふ刀鍛冶

新聞の遅れ来し朝悴めり